

2018 年度 学位申請論文（博士）要約

「遠州流」の成立と展開

A study of the Establishment and Expansion of “*Enshū-ryū*”

指導教員

中村利則 客員教授

芸術研究科芸術専攻

(学籍番号) 51511001

(氏 名) 菊池つずる

目次

序章 はじめに	1	第三項 桜山宗順は桜山一有か	31
問題提起と目的	1	第四項 『遠州流茶具規矩之伝』・『遠州流書院正飾之図抄聞書』	32
先行研究	1	第五項 『覚書』（慶應義塾大学図書館・箒庵文庫蔵）	38
小堀遠州について	2	第三節 村田一斎・桜山一有の書にみられる遠州	43
第一章 「遠州好」・「遠州作」・「遠州風」・「遠州流」の拡がり	4	第三章 「遠州流」の拡がり	46
第一節 「好」の使われ方	4	第一節 遠藤元閑	46
第二節 「作」の用例	5	第一項 遠藤元閑の茶書	46
第三節 「風」の用例	6	第二項 遠藤元閑茶書の花に関する記述	47
第四節 「流」の用例	7	第三項 教養の書としての需要	49
第五節 「好」・「作」・「風」・「流」の汎用と拡がり	8	第四項 遠藤元閑の板行書の意義	50
第六節 「好み」以前、「心」	11	第二節 青木宗鳳	51
第二章 「遠州流」の成立と展開	14	第三節 遠藤元閑・青木宗鳳の書にみられる遠州	54
第一節 村田一斎	15	第四節 「遠州流」花道の隆盛	56
第一項 村田一斎について	15	第四章 「遠州流」の伝播	59
第二項 村田一斎の伝本	16	第一節 広島の不二庵	59
第二節 桜山一有	27	第一項 幕末・広島で活躍したもうひとりの「不二庵」	59
第一項 桜山一有について	27	第二項 広島・不二庵 茶書	60
第二項 桜山一有の伝本	29	第三項 不二庵の茶室遺構	63
		第二節 諸藩における遠州流	67

第一項、	松平不昧	67
第二項、	松平定信	68
第三項、	会津藩および支藩	68
第四項、	仙台藩	69
結章		70
注釈		76
参考文献		86
史料・表・図版目次		87

序章 はじめに

問題提起と目的

江戸時代初期の大名、小堀遠江守政一に関しては、現在でも茶道・庭園・茶室など様々なところにその活躍のあとをみることができる。そして「遠州好み」・「遠州流」などという言葉が現在でも多く使われていることからして、遠州が後世に及ぼした影響は少なくない。しかし「遠州好み」・「遠州流」など、これらは一体いつ頃から云われるようになったのか、またどのような意味を持つのか、その詳細は明らかになっていない。

中村利則「遠州潜像―綺麗さびの世界」『淡交』一九九九・七月号)においても、「遠州好み」とする意匠や文様・建築・庭園も数多くあり、(中略)しかしそのわりには確実な遠州の遺構は、南禅寺本坊庭園や金地院の庭園・茶室八窓席、大徳寺孤篷庵・二条城二の丸庭園などと意外に少なく、多くが伝説の中に語り継がれてきた」と言っているように、現在、遠州の「好み」といわれるものが多くあり、遠州が語られているにもかかわらず、実際に遠州の手がけたものに関して明確にされているものは少なく、その実態は曖昧であるといえよう。それなのになぜこれほど多くの「遠州好み」が残っているのか、また、その意味するところにはいったい何があるのだろうか。

本研究はこうした歴史的グラデーションによって曖昧となっている「遠州流」を明らかにし、今日に至るまで「遠州好み」・「遠州流」の発生から展開、そしてその意義を明確にすることを目的としている。

先行研究

小堀遠州に関する研究は、政治、庭園、建築などをはじめこれまでも様々論じられてきた。政治における遠州の研究では人見彰彦『備中国奉行小堀遠州』、建築史では森蘊『小堀遠州の作事』、庭園史では重森三玲・重森完途共著『日本庭園史大系』などが挙げられる。また、近年には膨大な遠州の茶会記をまとめその全容を明らかにした深谷信子『小堀遠州の茶会』や、藤井穰治編『近世前

期政治的主要人物の居所と行動』(『京都大学人文科学研究所調査報告』第三十七号、一九九四年)などがある。このほかにも多くの先学によって、小堀遠州の研究は多角的になされてきた。

しかし、遠州以降の展開についてはあまり詳しくはない。そこでいま新たに、遠州と、「遠州好み」・「遠州流」の関係を見なおすこととする。なぜなら、長らく使われてきたであろうこれら「遠州好み」・「遠州流」という言葉、扱いがどのようにして生まれ広がっていったのか、これらを明確にすることでいま現在「遠州好み」・「遠州流」とされているものの様態を改めて整理・見なおすきっかけになるのではないかと考えるためである。本論では主に茶書や茶室遺構から「遠州好み」・「遠州流」の流れを追ってみていくことで、これを基底とし今後の詳細な研究への足掛かりとなればと考えている。

さて、遠州の好みを表す言葉としてよく使われるのが「綺麗さび」である。この「綺麗さび」という表現がいつからなされるようになったのか。本研究の目的である「遠州好み」・「遠州流」の過程を探る上でも重要な先行研究として、岩井茂樹「小堀遠州と『きれいさび』―美的概念用語の成立過程―」の論考があげられる。

これによると、この「きれいさび」という言葉が定着する以前は、もっぱら「遠州好み」という言葉が使われていた。「きれいさび」が使われるようになったのは大正時代になってからのことであった。本論ではこうした「綺麗さび」という言葉で表現される以前の、「遠州好み」・「遠州流」の展開について考察する。

また「流派としての遠州流の展開―その系譜と点前―」^三と題した廣田吉崇の点前の比較を主とした研究では、茶の湯における遠州流の系譜、点前の差異などを明確にしてまとめられている。本研究とは資料や視点など、重なる部分も多く参考になる。しかし、「遠州流」の歴史的展開としては、背景を含めたその全容は、いまだ明らかになっていないのではないかと本論ではそうした時代的流れの中で「遠州流」がどのように位置づけられ、今日にいたるまで広がりをみせてきたか、ということを明らかにしたいと考えている。

さらに、本論においては「遠州流」が広がりを持ち現代に続くまでの土台として、町人層による文化展開の場というものがいかにして「遠州流」に作用し

たかを考察したいと考えている。また、その前提として江戸期に発生し、隆盛した「図書出版」にも注目されたい。「遠州流」のひろがりに、この「図書出版」というのがひとつの大きな役割を担っていたであろうことが考えられる^四。

第一章 「遠州好」・「遠州作」・「遠州風」・「遠州流」の拡がり

その言葉の性格から、「遠州好」・「遠州流」という用語がよく使われている分野が、茶書をはじめとする茶道関係、ならびに花道関係である。ほかに庭園・建築にも使われており、これにより遠州の評価はこれまで、茶の宗匠として、また造形を手がけるアーティストとして、名前が残ってきたことは明らかである。そのなかでも本論で最も注目するのは「好」という語である。森蘊『小堀遠州』でも、「茶道具における「遠州好み」^五項において最初に「遠州好み」の解釈について触れ、数ある「遠州好み」を広義的に解釈することもできるが、「それらすべてが本当の意味の『遠州好み』とか『遠州の芸術』と呼んでよいかどうかには問題がある」と疑問を呈しており、「遠州好み」の解釈を明確にする必要があることを暗に示している。

第一章では使われている「言葉」の意味「好」・「作」・「風」・「流」について、史料などにみられる言葉の使われ方から、どのようにして現代における言葉の印象に終着したのか、その前時代における言葉の意味・作用などを通して考察する。またそれが現代の「遠州」を拡げた要因となつたのではないかと考えた。

「好」・「作」・「風」・「流」の汎用と拡がり

ここで筆者は「好」という言葉にはいくつかの意味があり、またそれはべつ々の語であることばと密接であることを理解する必要があると考えた。では「好」がどのような意味を含むのか、またほかの語とどのように関係するか見ていく。

まず、「好」について『日本国語大辞典』^六を引いてみると、動詞「好（この

む）」があり、「好（このみ）」はその名詞化した言語である。「遠州好み」といえば主に遠州が所持したものなどで、遠州が好んだもの、つまり気に入っていた、趣味にかなうものを指した語といえよう。不昧の選定した中興名物が記された『雲州蔵帳』などにみられるような、遠州が集めた秘蔵の品や遠州の見立てに適ったもの、すなわち、「好きこのんだ」意味合いのものである。

また、「好きこのんだ」ことを事實的「好」とすれば、直接それを見たり経験したわけではないが人づてに聞いたたり読んだりした「好」もあるわけで、これを「伝聞により遠州が好んだであろう「好」とする。

つぎに、桜山一有の『当流聞書口伝』にみられる例「一、松平陸奥守殿盛相ノ茶入蓋ハ盃ふた也、これハ遠州好、茶壺服入、名物唐物也」などは、「作つた」意味であると考えられる。

「作」もまた異なる意味合いがある。『日本国語大辞典』では、ひとつに「こしらえる」ことを指し、また「人名の下につけてその人の作品であることを表わ」し、それはほとんどオリジナルであることを示す。この「作」がどのようにして「好」と混線するのかを考察すると、次のように辿ることができる。

「作（さく）」は他動詞「作る（つくる）」の名詞化した言語である。しかし形容動詞になるとその意味は「趣向、くふう、思いつき」や「趣向や工夫を凝らしたさま」となる。ここで「好」と重なりをみせるのは「趣向」である。

この「趣向」という部分について、『日本国語大辞典』の「このみ」では「趣向。風流。数寄。」とあり、「このむ」では「風流があらわれるように趣向をこらす」とある。つまり「くふう」するのである。『本光国師日記』での「くさりすきやさしつ、遠州このみ一たんよく候、」という一文はこの意味で「趣向」の意味となるのであり、また「つくる」作為ともなるのである。

「つくる」動詞から派生した名詞「作」の扱の意味は、人の関与を示唆するのを前提とした「オリジナル」であり「人」と「作品」が直接に結びついていることであったが、形容動詞の「作」は人物から離れ、「行為に対する」真に独立したイメージである。たとえば小学館の『大辞泉』では用例に「作に過ぎた俳句」とある。「くふう」する、「趣向」を凝らす、という意味において「作」は「好」と重なるのである。

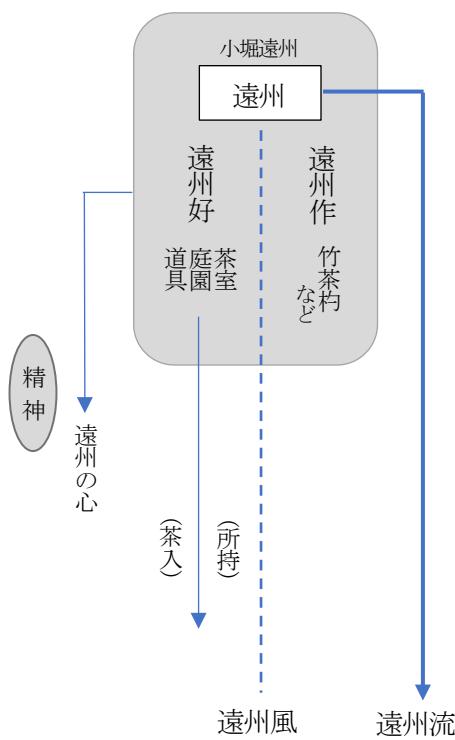
また、先ほどから例に挙げている「一、松平陸奥守殿盛相ノ茶入蓋ハ盃ふた也、これハ遠州好」にみられる「遠州好」は遠州の「作った」という意味で使われていると同時に、この例はいくつかの意味をもつであろう「好」のうちの状況的には「伝聞による」遠州好みであることも示しているだろう。

つぎに「風」は、イメージをイメージで語るような、これもまた極めて曖昧な言葉であるが、じつは「風」というにはその根底に確固たるイメージないしは、雛形のようなものが存在し、それによって「風」と言い表すことができるのである。辞書の中でも「ある範囲内で共通の様式、方法」・「人の姿や物の形」というように、タイプカルな意味が含まれている。矛盾するようだが、たとえば「日本風」などといえは「風」以前につく、名詞部分となるそのものの様子をまずは思い浮かべよう。つまり「なんとなくそんな感じ」という空漠とした印象だが、じつはその感覚的な表象もそれを想起させる外枠のような型があり、イメージはそのなかで得ているのである。

また「風」を「作」・「好」となればたとき、「風」は「好」に通ずるが、「作」には通じない。ときに「作」はその意味から「好」に転化し、その逆もまたあるが、「風」は「好」と通じていても「作」には辿り着かない。「風」と「好」の関係性は限定的である。それは裏を返せば「作」と「好」もおなじであるが、もとより「風」には動詞としての機能はないので名詞としての共通点しか見出せないことを考えると、当然ともいえる。つまり、この「作」・「好」・「風」の三者は「好」という言葉に相対しているのである。

より直感的に理解しやすいよう、関係性を図によって示すと次のようになる。まず、小堀遠州というオリジナルの存在「遠州」がある。そして、その周りに形成されるのが遠州に直接関係する「遠州作」・「遠州好」である。この両者が相互関係を含むことは先に説明したとおりである。たとえば「遠州作」には遠州が手作りできるものが含まれるし、建築用語で「遠州作」を意味する「遠州好」も「遠州」の範囲内にある。また、「遠州好」はその言葉の意味の多様性もありさらに展開し、「遠州」から少しずつはなれたところに遠州が所持したり、

好んだとされる伝聞の「遠州好」が顕れるのである。さらにこの関係性のなかで「遠州」からもっとも離れたところにあるのが「遠州風」である。これは「遠州」の「要素」でもって生成されたイメージであり、必ずしも「遠州」と関係するものではない。そして、一方に「遠州流」というのは、これら「遠州作」・「遠州好」・「遠州風」などとはまた別に、展開していったと考えられる。



ここで今一度「好み」について整理しておこう。「遠州好」その意味については次のように考える。

1. 小堀遠州が「すき好んだ」趣味・趣向の意味での「①このみ」。
2. 遠州が「好んだらしい」伝聞のなかにおいて触れられる「②このみ」。
3. 「つくる」と同じ動詞として使われる「③このみ」。
4. 「遠州風」という意味に使われる「④このみ」。

これら「好」・「作」・「風」・「流」というのは非常に複雑で、一概にひとくくりにできるものではなく、特に「好」の扱いはその最たるものである。先にも説明したとおり「好」には作る・好きこのむ・遠州風、などといった異なる意味が含まれ使われており、これが遠州以降の、遠州の拡がりを考えるうえで難点となっている。しかし、まずはこの複雑さを顕在化し理解・意識することが、本研究ではこの先に進むために非常に重要なことだと考えている。

「好」に続く派生語によって、その意味はひとつの印象を共有するし、または別のことを意味するものにかわったり、あるいはあるひとつの印象を内包しながら、ほかの言葉に転化したりすることもあるのである。

言葉自体はひとつであっても、その意味が多様化し境界が曖昧になり、関係性が複雑になる。つまり、言葉の本質は何かその「対象」に輪郭を与えるものであるはずが、次第に意味に拡がりが生まれ、それによって内包する意味が増え、今度は当初とは別のところで言葉が「遠州」という「印象化」を生む。つまり言葉にならない印象的な状態で、曖昧で感覚的なものになっていく。その最たるものがこの場合「好」に顕れていることがいえよう。

第二章 「遠州流」の形成 — 武家方の遠州流 —

つぎに「遠州流」がどのように発生し、どのような展開をみせたのか、というのを追っていききたい。とくに「遠州流」に関係する人物をとりあげ、その展開を考察していくなかで、「遠州流」の展開にはふたつの流れがあることがみえてきた。ひとつは武家による「遠州流」の展開があり、もうひとつは町人層における「遠州流」の展開があった。

ところで、千家に対して遠州流は武家茶道といわれる。そのように云われるようになったのがいつ頃かは明らかでないが、千家流茶道が成立しその対照として意識されるとき、はじめて「武家茶道」として顕れたのである。では「武家茶道」とは何をもってして云うのか。「武家」はどこに顕れるのかといえれば、ひとつに「御成」にあるといえるだろう。

「御成」は封建的儀礼の最たるものであり、武士にとっては大事とされた。ここにおいて行われるのは侘びの茶ではなく、貴人の、式正の茶であった。江戸初期には特に、徳川幕府の基盤を確固とするための政治的背景と、秀忠・家光の茶の湯好きもあって盛んに行われたが、以降は徐々に減っていくことになる。

では「遠州流」萌芽期における村田一斎と、その弟子・桜山一有を中心に、武家層による「遠州流」の展開をみていく。

第一節 村田一斎

第一項 村田一斎について

村田一斎は小堀遠州の茶枚の下削りをしていた人物で、茶の湯では師弟関係でもあった。墓所は滋賀県・近江孤篷庵にあり、そこには『孤篷庵茶点無尽蔵一斎記』と表題のつく茶書が所蔵されている。

1. 『孤篷庵茶点無尽蔵』(近江孤篷庵蔵)

巻数…全十一冊、七巻

表題下に「一斎記」と書かれている。

成立年代はわかっていない。ただ、「江州孤篷庵 定泰代」という印書きがあることから、昭和四十年(一九六五)に荒廃していた近江孤篷庵を再建した、小堀定泰によって整理されたものではないかと考えられる。内容は多岐にわたる、楷書体で書かれている。

七巻あるうち、遠州の名を採りあげみたところ呼称や頻度に変化がみられた。一巻では「宗甫公」が一回、「甫公」と出てくるのが五十五回であった。つづいて二巻では「甫公」が一回のみ、三巻では「宗甫公」一回、「宗甫様」一回、「甫公」が十八回であった。四巻では「宗甫」が一回で、五巻に至っては遠州の名はみられず、六巻に「宗甫公」一回がみられると、七巻ではこれまでみられていた「甫公」・「宗甫」などという呼称はなく「遠州」が九回、「小遠州」一回がみられた。この変化に、編纂された茶書の時代性や人物の関係性が覗われる。

成立年代が不明なため、史料としての扱いには注意が必要であるし、これを

村田一斎の書であると断定は出来ないなど、問題は含んでいるが、内容をみるに、ほかの茶書にも共通したもの、または『烏鼠集四巻書』や『古織伝』、『慶長御尋書』など、先師の習いとして多くの茶書を構成のなかにいれるなどしながら、小堀宗慶（正之）や宗実（正恒）からの聞書なども見られるのが特徴である。

第二節 桜山一有

第一項 桜山一有について

桜山一有「正保三年（一六四六）〜享保十三年（一七二八）」^九肥後熊本細川家の茶人。江戸中期の茶の湯記録である『当流聞書口伝』別名『桜山一有筆記』『桜山不二庵聞書』などとも云われ、これによって名の知られる人物で、史料は茶道史研究、特に遠州の研究では度々用いられてきたものである。これまで前出の史料は多く採りあげられてきたが、本論ではとくに桜山一有自身に注目したい。一有という存在が、「遠州流」を考える上で要点になっていると考えるのである。それはひとつに「遠州流」が武家茶道として、江戸に於ける存在の意義を示しており、その例を桜山一有に見いだせよう。

肥後熊本藩細川家では、古市宗庵を抱えてから肥後古流と呼ばれる茶の湯が行われてきたが、その一方で江戸の藩邸、あるいは定府であった新田藩では、国である熊本とはまた別の茶の湯が求められていた。それが遠州の流儀の茶であった。江戸藩邸および定府新田藩、つまり將軍のお膝元である江戸においては「式正の茶」が武家の教養として必須であったことは間違いない。遠州流茶道が武家茶道と云われるようになった所以は、当時こうした儀礼的教養の役割を担うと同時に、將軍に近い大名や武士にとってはそれを学ぶ必要があったためだと考えられる。時を経るにしたがい「御成」は次第に少なくなっていくが、將軍を相手とせずとも武家社会では各藩で藩主を頂点としてそれがひとつの形式となっていたと考えられる。

では、桜山一有は江戸でどのような立場にあったのか『茶湯古法』の書写奥書によると、熊本新田藩・藩主の細川利重（一六四七〜一六八七）の命により

遠州の直弟子であった村田一斎に師事することになったことが知られる。なぜ、利重は一有に対し村田一斎のもとへ弟子入りさせたのだろうか。その理由を次のように考える。

まず、第一に江戸という場所性である。先にも述べたとおり、熊本新田藩は定府であり、武士たちは教養として御成の茶を行える準備をしておかなければならなかった。それは式正の儀礼を知ることであり、特に大名ともなれば尚のこと必須であっただろう。そのため、利重は一有に対して式正茶の流を根本とする遠州の茶を学ばせようとしたのだろう。八尾嘉男は江戸で行われた遠州の茶会記から関係した人物を挙げて、「遠州門下の展開場として江戸が大きな機能を果たしていたことの現れ」を指摘していることから、特に江戸下ではそのような役割が求められていたことは考えられる。

遠州のあと、將軍の茶の湯指南役となったのが片桐石州であった。石州は茶を千道安の高弟・桑山宗仙に学び、独自に大名茶と侘び茶を融合させた「さび」の茶を茶風とした。石州をもつて柳營某の湯の規範が定められたことを思えば、これ以降の將軍の茶法は石州のやり方が踏襲され、大名や武家はなおさらそれを学ぶものであるだろう。しかし徳川幕府の式正茶を整えたのは他でもない織部であり遠州であつて、やはり式正の茶を学ぶには遠州に学ぶべきであるという意識があつたのだと考える。

第二項 『遠州流茶具規矩之伝』・『遠州流書院正飾之図抄聞書』（私家蔵）

一書的位置づけ

『遠州流茶具規矩之伝』では、はじめに寛文元年の年紀を持ち、さらに正徳五年に口授を終えたことによる年紀が記され、『遠州流書院正飾之図抄聞書』に至って享保十二年の年紀がみられるこの遠州流書は、どのような意義をもつものである。この「遠州流」を冠する茶書の存在について考えていこう。

まず『遠州流茶具規矩之伝』は、織部の江戸屋敷の座敷と京都屋敷の座敷および雪隠の図が記され、織部の茶室をメインに扱っている。さきほど「遠州流」を冠する茶書であるのにほとんど利休と織部の名前しかみられないことを記したが、利休の名は「茶器之部」以降に登場するのであつて、第一章にあたる「数寄屋之部」では利休の名はみられない。

戦国期には茶器が一国にも匹敵するほどの至上の価値であったが、利休・織部と茶の湯の様子は変化を遂げ、空間そのものも茶の湯において大事な要素とされるようになった。特に織部は將軍御成の茶を行う「織部格」の茶室^二を創りだした。その織部の茶室はほかの大名や茶人たちの見本とされたことだろう。『遠州流茶具規矩之伝』でも利休の茶室ではなく織部の茶室を書き留めている。遠州の名を冠する茶書には織部の習いが書かれていることが少なくない^{一三}。また、『遠州流書院正飾之図抄聞書』は書院茶の式正についてふれ、東山殿以来の武家茶道のルーツを示している。つまり、この二書はセットで成り立っており、この両方をもつて「遠州流」と冠することは武家茶道の根本とその正当性、および継承者としての「遠州流」を示しているのである。そしてこの強い意識は、時代的背景に起因していると考えられる。

正徳・享保年間には『遠州流茶具規矩之伝』・『遠州流書院正飾之図抄聞書』とも「遠州流」と名付きセットになることで、はじめて「遠州流」の意識が流派の習いとして個性を持ったのではないかと考えられる。それは当時、石州流の旺盛や、千家の家元制度の創始および利休百回忌による利休復古の潮流などによって、「流派」という意識が隆盛しはじめていた頃とも重なる。遠州の流儀を継ぐ者は茶の湯の正当な流れを示すため、利休・織部に触れ、遠州の流儀を「遠州流」というひとつの流派として意識しはじめ、その存在をより強調しようという思いもあつたのではないか。この頃、同じように流祖の再発見と、それによる正当なる茶の湯の継承者を主張しようとすることは間々あることであつた。

第三項: 『覚書』(慶應義塾大学図書館・箒庵文庫蔵)

これは江戸における肥後熊本藩細川家・茶道役と考えられる人物が記録した茶会記である。筆者としてはおそらく桜山家か桜山家に近い人物の記録ではないかと推測する^{一四}。

茶会記の記録の他は、あい間に茶の湯に関する知識であつたり点前覚え書きや聞き書き、当番日の記録である。茶会の記録に関しては、自ら参加したもの

ではないと思われる内容のものもある。また、桜山一有の『当流聞書口伝』にみられるのと共通した内容、人物などが確認できる。

江戸藩邸には伊藤喜斎や山田友賀など桜山一有のほか茶道役を勤める家があつた。彼等の茶の湯に関する痕跡は一有に比べて少ないが、藩士記録にはその名前と禄を見ることができると、伊藤家・山田家ともに村田一斎の門弟とされている。彼らがいづ頃から村田一斎の門弟となつたのか、それを記した確かな史料はいま見当たらないが、江戸定詰の両家が遠州の流れを汲んでいたことは、江戸における遠州流の意義がそこには顕れている。

本節では桜山一有に注目し、また彼の名が残る茶書が多いことが知られた。その内容は熊田与玄や、山上宗二など古い時代の人物のものから、織部や有楽など武家茶道における継承と習いがみられた。反対に、これらに含まれないのは、千家の習いである。利休のことはみられるが、千家については、いま手元にある史料にはみられなかった。

第三節: 村田一斎・桜山一有の書にみられる遠州

第一節では遠州の弟子・村田一斎の関係が思われる近江孤蓬庵の『孤蓬庵茶点無尺蔵』を、第二節ではその村田一斎の弟子・桜山一有の書を中心に、採りあげた。これら採りあげた遠州流茶書のなかでは、遠州はどのように記されているのだろうか。茶書の中にみられる遠州自身がどのような場面で、どのように語られるかをみることによって、「遠州」がどのように継承され、拡がっているのか、その一端がみられよう。

内容の分類については、つぎの通りである。

- ① 「逸話(教え色)」—遠州の逸話について、或いは遠州の評価、或いは逸話を通じた教えなどのこと。
- ② 「点前」—点前に関連したこと、たとえば点前手順のことなど。

③ 「建築・庭」―茶室などをはじめとした建築関係、および庭について触れていること。

④ 「道具」―道具の由来や、道具に関係する話などのこと。

⑤ 「飾りもの」―床まわりを中心に掛軸や香炉など、飾りについてのこと。

⑥ 「作法(教え色)」―所作や作法・準備などについて話されていること、

或いは点前などに含まれないであろう習い、またそれを通じた教えなどのこと。

⑦ 「書など」―遠州の書いたもの・筆に関すること。

⑧ 「その他」―遠州の名前には触れられているが主としてほかのことについて語っている場合など。

これらを村田一斎『孤篷庵茶点無尺蔵』と、桜山一有『当流聞書口伝』とで比較したところ、遠州の名がそれぞれ、九十例(無尺蔵)、百五十七例(当流)と、二倍とまではいかないが、それに近い開きがあった。

また、『孤篷庵茶点無尺蔵』が全七巻のうち九十であるのに対して、『当流聞書口伝』は上・中・下三巻のうち百五十七である。『孤篷庵茶点無尺蔵』はすべてが村田一斎のものとはいえない切れない事情があり、かならずしも遠州に拘泥しない記述が多いが、その後の遠州流を形成していくなかに遠州との関わりを強調するようになってくる。

『孤篷庵茶点無尺蔵』では、遠州の名がみられるのは「道具」についてもっとも多く、つぎに「建築・庭」、「飾りもの」と続くが、「逸話」については二例しかみられなかった。これとは逆に、『当流聞書口伝』では、「道具」関連がもっとも多いのは変わらないが、次点で「逸話」がもっとも多く見られた。そして『孤篷庵茶点無尺蔵』では七例あった「点前」は、『当流聞書口伝』では見られなかった。

こうした違いから、『孤篷庵茶点無尺蔵』では、遠州自身のはなしより、遠州の意識が道具まわりにもっともよく表れているとして、これが記述として多くなり、『当流聞書口伝』では、道具もさることながら、遠州の態度や人となりなどのようであったか、そこに学ぶことがあるとして、逸話関係が多く記されるようになったのではないかと考える。

『孤篷庵茶点無尺蔵』は村田一斎との関係を示唆する書であるが、古い時代の茶書の習いを含むなど、必ずしも遠州に終始しているものではない。それは、遠州の時代には当たり前の態度であったといったほうがよいだろう。だからこそ、遠州の趣向が唯一頭れるだろう道具に、または建築や庭に、多く遠州の名前が登場しているのだろうと考えられる。しかし、『当流聞書口伝』ではそれにも増して、遠州の態度からより多くを学ぼうとしていた。それは、將軍の茶が石州に移ったあと、江戸において遠州がどのように評価されるかという、石州に対する意識も少なからず影響していたのではないかと思われる。実際に、『当流聞書口伝』では石州の行動に批判的な話しを書き留めている内容がみられた。遠州流の人間にとって、こうした時代の移り変わりが、遠州の姿・輪郭を浮かび上がらせ、名人たる遠州の人物像をより求めていたことが「逸話」の多さに頭れているのではないかと考えられる。

第三章 「遠州流」の拡がり ― 町方の遠州流 ―

前章では武家における「遠州流」について考察した。本章では、町人層における「遠州流」の展開を追ってみていく。

取りあげるのは、図書が盛んに板行されるようになった元禄期の、遠州流茶書の出版で活躍した遠藤元閑と、大坂で独自の遠州流をとなえ試行した青木宗鳳とである。また、江戸後期に入ると庶民にひろく流行した、いけばなを通して、「遠州流」が流行していった様相をみていく。

第一節 遠藤元閑

第一項 遠藤元閑の茶書

町人文化が旺盛した元禄前後、印刷技術の発展もあり、じつに多くの図書が出版された。そのなかには茶書も含まれており、それは需要の広がりを生み、

武家など上流層のみならず町人層への茶の湯の普及をも助長したことであろう。そんな江戸中期に、遠藤元閑は多くの茶書を版行した人物である。彼は遠州流茶人・岡部道可に師事し茶道を修めたという。その経歴などについては、先行研究・横田八重美『遠藤元閑の板行茶書』^{一六}に詳しい。これによって彼の版行書については九点、没後の改題本三点と写本一点を取り上げ内容について明らかにしている。

遠藤元閑の茶書の大きな特徴は、啓蒙的要素と徹底した実用書であったことであろう。それというのも本の対象者が、茶の湯を嗜めるほどの裕福な上流市民、あるいは先述の先行研究でも指摘されているように、必須教養として求めていた藩士などであったためだと考えられる。茶書の内容では御成のことに触れており、その際「主人御成之時ハ」と始まっており、「將軍」ではなく「主人」であることから主語が変わることで各藩において藩主などを想定した御成にも応用できよう。また、あるいは有力な商家などは藩においても藩主とつながりがあったことも考えられ^{一七}、裕福な町人であっても教養として目学問としていたとも考えられる^{一八}。

第二項、遠藤元閑茶書の花に関する記述

遠藤元閑の茶書でもうひとつ興味深いのは、花についてである。先述の横田八重美も、茶花に関して、つぎのように注目している。

茶花は時を生けるといふ側面を持つているから、もともと書物に生けた形を残すには馴染まない。さらに生け様も人によって様々に異なるものであり、その作為が貴ばれるものであった。茶花を生けた姿で固定することは、この変化を否定することにつながりかねない。だからこれまで形として残されることがなかったのであろう。元閑はこれを図示したのである^{一九}。

遠藤元閑は、最初の板行茶書『茶之湯三伝集』で花について図を付しているが、このときはまだ「花之枝嫌の事」という項でのみ、簡単な図解をのせてい

た。つぎに元禄五年（一六九二）一月に板行された『雪月集』上巻には、座敷とみられる「立花」とする床飾りの生花図・五葉と、なげいれと思われる花の図も五葉みられた。しかし、このときに描かれた花の図は、前半に記された習いの説明に関連しており、いわゆる本文に対する挿絵であり、説明的な表現であった。

この後、おなじ年の九月に刊行された『茶之湯古今或問』では、花の図が大幅に増え、より詳細な生花の姿が描かれている。

元閑はまた花の「なげ入（抛入）」について、いけ花には立花のようにきまりはなく、自由に生けるものであると、いけ花と立花の違いについて語っている。そして元禄九年（一六九六）刊の『茶之湯献立指南』では、生花の図は十点描かれ、描写はさらに詳しく写実的になっており、版を重ねるにつれて花の描かれ方に変化がみられた。

遠藤元閑の著した茶書には、武家茶道を基底としながら、町人層にも取り入れられる要素が散りばめられている。さらに、花の事は『茶湯評林』においては一冊を花専門に記しており、花に関して独立した扱いをしていることから、花に対する比重と意識が大きく変化しているといえよう。

第三項、遠藤元閑の板行書の意義

さらに、遠藤元閑が「遠州流」の茶書を板行したことは、図書出版が隆盛する江戸中期に、茶書としてどのような位置づけがされるであろう。筒井絃一『茶書の研究』では実に多くの茶書を年代順に網羅していることから、これを援用して板本が増える寛永頃からの特徴をみていくと、元禄に入り山田宗偏や遠藤元閑が出すまで版行本による「流派」の茶書というのは見られなかった。

また両者の出版した茶書がもつ特徴の違いとしては、侘びの茶か、武家の茶か、というところに顕れているであろう。例えば流派の軸として、宗偏の茶書は利休・宗且を主にしているのに対して、遠藤元閑は利休・織部・遠州と歴代の將軍茶道指南役である三宗匠を取りあげて、その継承について示唆している。

宗且に学んだ侘び茶の山田宗偏と、遠州の弟子・岡部道可に学んだ武家の茶である遠藤元閑では、茶の性格からしてそのような違いがあることは当然であ

るが、「流派」の茶書として版行するときにおいては、その意味は大きい。この違いこそ、「遠州流」の核心部分といえるものであろう。しかも元禄二年には、世の中は利休百回忌をむかえ、利休復古の機運である。本来その舞台であった武家の世界では、遠州の後任として石州が茶の宗匠として將軍の茶の湯を担っていた。そして、その石州も、武家茶道ではあるが、侘びの茶であった。茶の湯をめぐる価値観や意識が、全体的に千宗旦に連なる侘びの傾向をみせていたことが想像される。こうしたなか、式正性を備えた武家茶道の性格を有する遠藤元閑の遠州流茶書は、侘び茶の千家と対置した性格を有するものでありながら、社会的多数派である町人層の存在も、大いに意識したものであったといえよう。

第二節 青木宗鳳

江戸中期の遠州流茶人でもうひとり取り上げるのが、青木宗鳳である。青木宗鳳は元禄三年（一六九〇）に誕生し、明和二年（一七六五）に七十六歳で没している。茶の湯を山田大有にまなび、みづから膨大ともいえる茶書を記した。それらはいま「浪華文庫」として今日庵文庫に架蔵されている。

宗鳳が生まれたのは利休百回忌および『南方録』があらわれたちようどその年であり、物心つくころには茶の湯は町人層にも広まり人気を博していたであろう。彼の活躍の時期も、千家が家元制度を確立した時期とちようど重なる。前節の遠藤元閑より一、二世代あとの人物であるが茶書の刊行を禁じていたことから^{二〇}、遠藤元閑とは対極にある人物といえる。

宗鳳の茶書の特徴については、その伝授系譜からして特異なものがみられ、自身の茶系を津田宗及の流れをくむものとし、台子伝授による師弟関係を第一に、宗及の子息であった江月和尚から遠州が台子を伝授され、また遠州から黒田正玄に伝受があり、さらに山田乗仙へ伝わったとしている。

本箱五棹にもわたる「浪華文庫」の収蔵内容については、山田哲也によってその全容が紹介されている^{二一}。しかしこの中には遠藤元閑による茶書が見られ

ない。遠藤元閑の板行書は宗鳳が生まれた頃に盛んに出版されていたので、同じく遠州流を称する宗鳳が参照しなかつたということはあるのだろうか^{二二}。「浪華文庫」には『草人木細註』や『源流茶話細註』・『茶道要録細註』・『石州流和泉草細註』など、板行茶書を注釈したものが収められているのを見ると、なお疑問に思う。この一因として考えられることは、やはり茶系の主張の違いにあるのではないか。

宗鳳の遠州流は本来は宗及流であるという主張を考えると、遠藤元閑が主張する將軍家式正の茶の継承者、すなわち利休、織部、遠州という茶系の立場とは相容れないものであろう。おなじ正統性を主張するのに、遠藤元閑は將軍家茶道という根拠によって、青木宗鳳は利休よりも古人の津田宗達からの継承であるという根拠によって、それぞれが主張しているわけである。しかしこの主張の違いにわずかな時間のあいだに大きく動いた時代の背景を思わせる。それというのも遠藤元閑の頃よりも、青木宗鳳の頃の方が、千家がより隆昌していたのである。遠藤元閑のころには利休百回忌があり千家茶道が世に広まる黎明期であった。それからしばらくして千家が表千家七世・如心斎とその弟である裏千家八世・又玄斎一燈と共に七事式を制定した。利休を祖にもつ千家が確固たる茶の家として地を固めていく、宗鳳はこの時に直面していたのである。

第三節 遠藤元閑・青木宗鳳の書にみられる遠州

第二章でも試みたのと同じように、遠藤元閑・青木宗鳳、両者の茶書に、遠州はどのように記されているかを見ていったとき、遠藤元閑、青木宗鳳とも、第二章でみた村田一斎・桜山一有のころに比べて、遠州に触れる内容が全体的に少なくなっていることが知られた。これは、「遠州流」が遠州に連なるという意識から離れ、流儀が形骸的なものへと転化したといえるであろう。一斎・一有のころには、遠州について全体の内容では比較的バランス良くみられた。しかし、遠藤元閑や青木宗鳳のころにもなると、遠州という人間からは離れて、道具などに多くその名前がみられるようになる。

「流派」の成り立ちが取捨することによってそこに顕れた個性が外殻をつく

り成り立っていくならば^三、遠州流の場合その個性となり得るものを、武家茶道宗匠の遠州という特別性と、美意識の表象としてわかりやすい道具などに、それを見いだす流れとなったのだと考えられる。

第四節 「遠州流」花道の隆盛

「遠州流」花道は幕末から明治期にかけて特に流行したもので、その板行書に關しても、これまで茶の湯關係に多くみられていた「遠州流」が、突如として花道書にあらわれるのである。これまで、茶の湯では千家や石州流などが目立ち、対して遠州流はそこまでの流行をみせなかったといえよう。しかし、花道に關してはもっぱら「遠州流」が旺盛したのはなぜであろう。このことを明らかにすることが、近代「遠州流」に対する意識を明らかにすることに繋がるのではないかと考え、ここに考察を進めたい。

花道の歴史はいうまでもなく、仏前に供えるシンメトリーな供花にその端を発しており、やがて一瓶立てをして賞翫する「立花」が流行し、池坊専応をはじめとする池坊家がその「立花」を主導していた。なげいれが見られるようになるのは版本では貞享元年（一六八四）に『抛入花伝書』という表題の花書がはじめであろう。

板行茶書において花に注目したはじまりは、遠藤元閑であったと考えられる。これについては遠藤元閑が新しく茶書を板行するにつれて、記される生花・なげ入の比重が徐々に変わっていき、やがて一冊独立して記されるなど、花の扱いに変化が見られたことが知られた。特に、遠州流が武家茶道に源をもつとはいえ、町人にも取り入れられる時、もともと手軽なポイントは、花であったであろう。

さて、茶書ではなく花書として、遠州流の書が板行された最初とみられるのが、貞松齊一馬による寛政十二年（一八〇〇）跋の『挿花衣之香』である。これは享和元年（一八〇一）に板行されている。花道の「遠州流」が世に広がるのは、この貞松齊一馬の出現からであろう。享和元年に遠州流花道書の板行が

はじめて行われると、その後新しく出したタイトルも含めて幾度も後刷りされるなど^四、その人気がうかがわれる。文政十三年（一八三〇）『嬉遊笑覧』^{後世生花師}の項には、「江戸に近ごろ専ら行はるゝは、遠州流、石州流、宏道流などゝて、何くれといへども、大かた遠州流といふものと異ならず、遠州とは小堀宗甫の名を暇たるにてもとよりあらぬことなり、」とこれも遠州流の隆盛を物語る記述である。

江戸後期に花道がここまで流行したのも、時代による生活背景というのが影響としてあっただろう。徳川が泰平の世を築きしばらく、社会経済も生活環境もそれなりに整い、特に元禄以降、文化享樂の中心は町人たちであった。そうした世の中で、茶の湯もひろまりを見せたが、生け花は茶の湯ほど道具などを必要としないため、もともと気軽で身近なものであった。

また、花は生活に四季の彩りをそえることもあり大流行したと考えられるが、さらには、その背景として、「床」という飾りの装置が町人の家が増えたことも一因であろう^五。このような「かざりの場」を設けることが庶民の家にもみられるようになると、そこに彩りと四季の「時」である花が生活の中に取り込まれ、飾られるようになっていったのだろう。そしてそこに飾られたのは御殿に生けた「立花」ではなく、それを略したともいわれる「なげ入」の花であった。

では、花道における「遠州流」はどのように発して展開を見せたのだろうか。いけ花の庶民における需要は、茶の湯や俳諧など、諸文化の遊芸化がみられるようになった元禄期に、芸道として広まりを見せたとされる。そのころ、花道書として「遠州流」のいけ花を記すものを、筆者はいまのところ確認できていない。しかしその芽を、様々な有名人物の生けた花と設定され描かれた花道書『立華訓蒙図彙』（元禄九年—一六九六）にみることができよう。それには「橋柱」や「五重切」など遠州流の数寄の美意識として、趣向を凝らした花の様相が描かれている例をみることができる。

また、貞享元年（一六八四）『抛入花伝書』にある老功の話として書かれた習いが江戸後期になると拡がりを持ち、『生花早満奈飛』（天保六年—一八三五—嘉永四年—一八五二）には遠州と絡めて登場するようになる^六。こうした逸

話を転じて遠州を当てはめることは、江戸後期において遠州の像が数寄の美意識によって作り上げられていたことが示唆されるのだと考えられる。

こうした例から、茶の湯といけ花では、求められる遠州の像が違っていたように思われる。それは、茶の湯が茶事・茶会という一連の流れがあるのに対して、いけ花は完成したそのものが全てであるという、ふたつの間にそもそも大きな相違があるためであろうと考える。

茶の湯は点前・作法などの動作を見せるもので、自らの行動によって客をもてなすというコミュニケーションを生み出すために、それら挙動や空間を作り出すこと、また道具を選別するなど、さまざまな修練が必要になる。しかし、いけ花、とくになげ入は完成した作品がすべてであり、またいけた人のセンスがそこに顕れているとしてみるものであろう。作品というむき出しのセンスに対して個性を見いだし、その写る個性に付加価値を得る。そういつた観点から、茶の湯ではしだいに遠州という人間性から離れていったのに対して、いけ花のほうではむしろ過剰なまでに遠州の像を強調しようとしたのではないだろうか。

このように、遠州流花道の流行は、茶の湯における遠州流の展開とはすこし異にしているのではないかと考える。それは、武家や裕福な町人を中心に展開した茶の湯と、どちらかといえば一般層の方が多かっただろう町人文化を背景にして、いわゆる「流行」として展開した生け花では、展開の場からして違いがあったといえよう。江戸時代中期以降は町人層を中心に栄えた文化現象が多く、その背景は茶の湯を含む複合的な文化の享樂が、その結果を生み出していたのだろう。

そうしてより多くの人々に受け入れられたことによるいけ花の流行は「遠州流」の定着化へとつながったと考えられる。だがその時期は、貞松斎一馬の出現する江戸の後期まで俟たねばならなかった。しかし、その兆しは確実に江戸中期には芽生えていたことがいえよう。

第四章 「遠州流」の伝播

前章までは、遠州没後に、どのようにして遠州が「遠州流」へと発展してい

ったのか、その発生と展開をみてきた。本章では「遠州流」がどうして伝播したか、広島地方の瀬戸内周辺にみられる遠州流宗匠・不二庵の活躍を中心に、江戸後期、遠州に傾倒した松平不味・松平定信にもふれて、そのまわりに見られる遠州流を追った。

第一節 広島の不二庵

第一項 幕末・広島で活躍したもうひとりの「不二庵」

遠州流・不二庵、といえば、さきにも登場した桜山一有がまずは思い浮かぶが、一有のほかにも「不二庵」として幕末の瀬戸内を中心に活躍した人物がいる。

広島の不二庵に関しては、資料不足のためそのほとんどは不明な点が多いが、竹原市蓮照寺に在った墓碑^モには不二庵に関する記述がみられた。それによると父は大崎島のひとで、黙翁といい、はじめは僧で名を諦念を名乗っていた。やがて黙翁は京に上り、不二庵に住んでいたといい、遠州流の茶をして、庭園の技術も優れていたのであろう。のちに詳論するが、文政六年に京都から茶室を移送しており、この遺構はいま、広島県呉市御手洗の旧金子邸に見ることができる。手前座天井裏板には「文政六年（一八二三）癸未二月、遠州流宗匠、不二庵好」とあり、黙翁の好みであった。

この不二庵に関しては竹原の地元新聞・芸南新聞が昭和五十年代に詳しく調査しており、これに関する紹介を掲載しているが、当時でも資料の不足から詳しいことは判らず、読者への協力を呼びかけていた。

しかし広島の不二庵については、父である黙翁、息子である黙甫（正道）と、二代にわたり呼ばれた名ではないかと考えられる。先の墓碑でも「人呼其居称不二庵」とあることから、その住人を不二庵と呼んでいたのであろう。

第二項、不二庵の茶室遺構

今回、広島・不二庵の残した遺構のうち舩木邸・森川邸・旧金子家の茶室三件を調査することができた。その調査を経て、ここに「遠州流宗匠」を名乗る広島・不二庵の作事に関して考察をしたい。

1. 旧金子邸

広島県呉市御手洗にある旧金子邸は、平成二十三年（二〇一一）に市の有形文化財に指定されており、歴史では御手洗条約の舞台となったことでも知られている。金子氏（屋号…三笠屋）は御手洗町が開かれた当初からの住民で、町年寄・庄屋役を務めるなど、御手洗の有力者であった。不二庵作という茶室は、唯一現存する江戸期の上田宗箇流の茶室であるという。

この茶室は四畳の下座床で、北に躰口があり、東に四尺四寸五分の床、南に茶道口、南西側に通い口がついている。四畳であること、そして通い口と茶道口の位置を除けば、床は北壁に寄って付けられており、躰口はその北壁のほぼ中央に位置し、躰り入ると正面に点前座が構えてある、というのは遠州の伏見奉行屋敷の四畳大目茶室によく似た型である。

通口を出ると廊下（縁側）つたいに他の座敷に移動できる。窓は通口の上に下地窓、そこから入って左手の西壁に二段の色紙窓（上が下地窓、下が戸襖張りの連子窓）、南は躰口の上に二尺四寸八分の連子窓、その横に二段の窓（上が下地窓、下が戸襖張りの連子窓）、床内北に墨蹟窓があり、点前座に風呂先窓とすべてで八窓ある。

さらに、この茶室で興味深いのは、不二庵の名前がある出荷札と木材に記された記号である。この茶室は一度京都で建てられ、それを解体して御手洗まで運んでおり、再度組み立てる際に目印としたのが記号の意味である。さらに軒柱の東石など外の石には京都の加茂七石が使われるなど、そのほとんどを京都でそろえた贅沢な茶室である^{二八}。

また、この出荷札の年紀に注目してみると、文政六年（一八二三）とみえ、この年に茶室が京都において好まれたことが知られた。

好まれた年紀から考えると、ここに見られる「不二庵」とは、三原正道の父である黙翁のことであろう。不二庵が広島へ招かれる以前のもので、まだ親子

が京都に住んでいた頃だと考えられる。

一・擁翠亭との類似点

さて、この茶室の特徴は四畳・下座床の八窓席で、二カ所ある色紙窓の下の連子窓は、下辺が地敷居にまで達しており非常に低く、戸襖が建て込まれている。これとよく似た窓が、近年復元された「擁翠亭」にみられる。稲垣栄三^{二九}「茶室・数寄屋建築研究」に「後藤勘兵衛茶室」^{三〇}として起絵図が載っており、これによると、この低い配置の窓と戸襖は特に希なものである、と記している^{三〇}。金子邸茶室と擁翠亭の類似点は窓の構成だけでなく、その配置にもみられた。ただ、中柱が金子邸は歪み柱なのに対して、擁翠亭はまっすぐの丸太柱であるなど違いはみられる。しかし、遠州好といわれる茶室の中柱には歪み柱が用いられることも多く、遠州流宗匠を名乗る茶人として遠州風の遠州好を取り入れたということであろう。

すでに述べたとおり不二庵は京都に住んでいたことがあり、もしそのときに擁翠亭をみる機会があったのなら、これを参考に金子邸の茶室へ応用したのではないかと考えられる。

二・御成型茶室

また、この茶室の特徴は茶室内部に限らず、むしろ躰り口とは別に通い口がついていることに注目したい。通い口とは、茶室で茶を飲んだあと、この「通い」を通って別の部屋へ場所を移し「後段のふるまい」がされるための流れをつくる出入り口でもある。これは御成の茶でよくみられる数寄屋から鎖の間・書院への一連の流れで、いわゆる武家の茶として特徴づけられる、格式のある茶のふるまいである。名古屋城二之丸・北庭園に面した、織田有楽作^{三一}と考えられる「猿面茶屋」とも、同様の仕立てである。「猿面茶屋」でも通い口から出ると広縁を通して部屋を移る。金子邸にもこうした通いがついているということとは、武家的な茶の湯がされていたのであろうことが推測される。その背景には、瀬戸内の要衝・御手洗^{三二}で有力な家である金子家と安芸藩主・浅野家との関係があったためではないかと考えられる。

2. 船木邸

三原市にある船木邸の不二庵茶室は建物の北に配置し、庭に面している。畳は五畳敷でそこに一畳分の原叟床が付いている。この床を正面にみて右手に付書院があり、左手壁には特徴的な切り抜き窓がある。また、床に並んで付書院との間にある奥の壁にも窓があるほか、庭に面する方は壁ではなく全面吐き出し口になっており縁側がぐるりと回っている。開放感があり非常に明るく洒落な座敷である。このように部屋の二辺が障子で非常に明るいこの茶室は、たとえば松平不昧の独楽庵などにもよく似ており、幕末当時にもみられる茶室のタイプといえるであろう。

3. 森川邸

不二庵作という四畳半茶室、入り口は東北向きで貴人口といえる四枚障子、室内には貴人口より上がってすぐ右手に戸襖があり、開けると水屋に繋がっており道庫としても使えるようである。南にある床は一枚板でできている一間半の踏みみの板床で、落し掛けは鴨居下から天井廻縁まで四寸三分五厘と非常に狭い。西南に色紙窓があるが、上段が障子で下段が二枚の太鼓襖である。火燈口の茶道口は太鼓襖で、以前は茅葺だった屋根は現在は銅版である。

特徴としては、窓に太鼓襖が使われている点と、一面が四枚障子の入口、一辺一面が一枚板の床である。四枚障子は全面開放すれば庭が一望でき、あるいは庭の一部として空間の連なりの中に身を置くことを感じられるものである。これは明らかに抹茶的茶の湯の場ではなく、清風・自然の中に身を任せる煎茶的感覚だろう。また、一間半にもなる特徴的な床は、西川一草亭にもみられるような、いわゆる花床でもあったのではないかと考えられる。

さらにこの茶室には先述した旧金子邸との類似点があり、それは特徴として挙げられる低くつけられた地敷居窓で、そこに太鼓襖が立て込まれている点である。こうした意匠がみられるのは、さきに旧金子邸での例があったからであろう。

旧金子邸・船木邸・森川邸はどれもタイプが違い、旧金子邸はスタンダードな抹茶席で通いのついた御成風、船木邸は書院風、森川邸は煎茶風である。

不二庵は、父・黙翁のころにすでに瀬戸内海を中心に関係を持って金子邸の茶室をつくり、また、残る茶書から知られるように茶を教えていたりしたのだと考えられる。そうした地盤を引き継いで、息子・黙甫は川口屋によって広島へ招かれ、それから次々と地元の有力量者の依頼に応じて庭や建築を行っていたのだろう。不二庵の遺構をみると、御手洗の旧金子邸だけではなく、頼家や吉井家なども手がけており、有力な地元商家と広島藩主・浅野家との切っても切れない関係性が覗える。

こうしたことから、地方における「遠州流」の拡がりや、その地元の背景などと共に展開しつつ、その格式性によって求められた場面があったと考えられる。一度衰退したかのようにみえた「遠州流」は、実際には地方において、特に地元の有力者により積極的に、あるいは脈々と受け継がれていたのだろう。こうした例は、富山県の内山家^{三三}や、北前船の要所である山形県酒田市の光丘文庫^{三四}などにおいて遠州流の古典籍がみられる理由ともなるのではないだろうか。

第二節 諸藩における遠州流

江戸中・後期における遠州流について、まずは著名なふたりの人物について取りあげた。ひとりには松平不昧、もうひとりは松平定信である。

第一項 松平不昧

松平治郷こと茶人・松平不昧は、茶道不昧流の祖であり、寛延四年（一七五二）、出雲松江藩六代藩主・松平宗衍の二男として誕生した。茶人として特に優れていた治郷は、名物・油屋肩衝をはじめ多くの名品を手に入れたという。文政元年（一八一八）に死去。墓所は松江市の月照寺ほか、京都紫野大徳寺塔頭・孤篷庵にもある。

松平不昧は茶を石州流・怡漢宗悦の弟子であった伊佐幸琢に学び、その茶風は多くの派を生み出した石州流にあって不昧派として現在まで続いている^{三五}。さて、松平不昧は学んだ流派こそ石州流であったが、特に遠州に傾倒していたようで、よほどの茶数寄であったとみえる。寛政五年（一七九三）に紫野孤

篷庵が火事で焼失したのを、のちに不昧が再建したことから、遠州に対する並ならぬ心が顕れている。この時、古図をもとに再建したとされるが、実際には焼失前にはなかっただろう部屋も取り入れられており、これには一層不昧の遠州敬慕の念が見えるようである。では、この時に取り入れられた部屋とはどこを指すのか。それが龍光院・密庵席を写した山雲床である。

前述のとおり、もとより龍光院にある密庵席は遠州好みであると云われてきた。寛政のころに松平定信が蒐集した起こし絵図に「囲建地割、小堀遠州好、大徳寺塔頭龍光院ニ之有」とあり^{三六}、このときには「遠州」の囲である、という認識がされていたことが知られる。当時の認識からして不昧はこの密庵席を遠州のものと思ひ、孤篷庵再建の際に組み込んだのではないかと考えられる。密庵を遠州のものとする疑いなく写したというのは、それだけ遠州の風が表れていたということであろう。とくに、このような「遠州」の伝説は、おなじ十八世紀末頃に桂離宮が遠州作であるとしてすでに語られていることから^{三七}、当時、遠州が建築においては特別な存在であったことが覗える。

第二項、松平定信

松平定信は、宝暦八年十二月（一七五九）御三卿田安德川家に七男として生まれ、陸奥白河藩二代藩主・松平定邦の養子となる。とくに定信の進めた改革の中でも「寛政異字の禁」は、上下関係を重んじる朱子学以外を認めないなど、封建的で前時代的、いかなれば下克上を諷めた寛永前後の、遠州の時代を彷彿とさせるものである。そして、茶の湯に関しては、『茶事掟』や『茶道訓』、『心の双紙』、『老の波』、『茶桶録』など^{三八}、定信が残した茶書の類をみるにじつに多くあることから、決して否定的であったわけでも、興味がなかったわけでもないらしい。『福島県史』の茶道項では、定信の茶の湯についてつぎのように触れている。

松平家の茶道は遠州流であったが、いわゆる奇麗さびを旨とする大名茶の遠州流が、時代とともに華美に流れているのを憂えて、利休の素朴な原

始茶道にもどそうと改革運動を起こした。『茶道訓』を著わして家臣を戒しめたのをはじめ、「中略」さらには六二冊に及ぶ『茶道之書』を編纂して、遠州流を改めてお家流を開いた。

松平家の茶道は遠州流であったという。ここでいう「松平家」がどこまでを含んで指しているのかは知れないが、少なくとも定信は遠州流を基にして自流を求めたらしい。定信は「遠州流が華美に流れて」いるのを見て、利休のころの茶に立ち返ることを推称したということであるが、それはただ「侘び」を求めるのではなく、精神的な面をさしているのであろう。つまり、道具にはしない、「茶の心」を第一としたものであり、遠州を否定するものではなかった。定信の批判的意識は華美に流れた「遠州流」に対してであり、將軍家の式正茶を整え、封建的思想を取り入れ、「書き捨ての文」などをのこした宗匠・小堀遠州に対しては、むしろ敬仰する心持があったのだろう。

不昧、定信の兩人ともさほど年齢はかわらず、おなじ時代を生きた者たちである。このふたりともが、遠州に対してなにかしらの心を持っていたということは、武家茶道において、いまだに遠州の存在・影響は大きかったことが覗える。

第三項、諸藩

松平定信は白河藩であったが、おなじ福島県内でも会津藩は、保科正之が就封（寛永二十年—一六四三）するとともに、藩茶道に遠州流と石州流を定め「会津藩茶道方」を設定したという^{三九}。

会津藩の例からみると藩における茶の湯には、利休よりの哲学的・精神的な侘び茶と、格式ある武家大名の式正茶と、両方が同時にされていたことが知られる。石州の茶は、侘び茶でありながら、四代將軍・家綱の茶道指南役とされるようになったことで武家茶道であるが、石州自身は書院飾りのことなどは「小笠原二尋可申事ノ由」^{四〇}などと云っていることから、式正の茶に関しては自ら得意としなかったのではないだろうか。

『福島県史』には、「廢藩によって藩茶道がとだえ、遠州流は本県茶道界から姿を消したとみられるが、石州流は会津に残り、徳川中期に入ってきた江戸千

家が白河にその系列を存続した。」と云う。藩制廃止と共に姿を消した遠州流は、藩茶道における二柱のうちのひとつであり、その存在は式正の武家茶道由来であったために置かれていたのだろうと考える。つまり、遠州流を置いておく、あるいは学ぶことは、武家の茶道における様式のひとつであったとも考えられる。

桜山一有も、細川利重公からの命によって遠州流を習うようになったことが知られたが、国許の熊本では利休よりの古流がされており、これも、会津藩同様に、藩のうちでは二つの流派が藩茶道として行われていた例である^{四一}。

また、福島県では花道についても、幕末から明治にかけては、各藩では池坊系の流派がされていたようであるが、明治に入ると会津をはじめとして、福島・須賀川・双葉群川内などに、遠州流、宏道流の事跡がみられたようで、このときに見られる遠州流は、拔選遠州流や河原辺遠州流というものであったという^{四二}。大正期になると、遠州流・正風遠州流の流派が入ってきて、昭和になると遠州系以外にも様々な流派が県内に流入したようである。

さらに仙台の例ではあるが、清水家所蔵の書類のなかに、慶応元年の藩茶道関係者の記録がみられる^{四三}。これによると、「御茶道」一名、「奥御茶道」が十六名、姓名と石高、流派が記されており、「御茶道」には清水道慶、下田雄喜の兩名が記され、どちらも石州流である。「奥御茶道」には十六名が記されているが、うち四名が遠州流であることは興味深い。石高も、御茶道頭以外の茶道役とそう変わらず、三十五から四十五石となっている。また、花に關しても遠州と池坊がされていたようである^{四四}。

仙台藩の御茶道・清水家は遠州と親交のあった道閑からはじまり、道閑の息子・動閑より石州流となり、これを藩茶道として幕末まで継いでいくことになった。しかし先の清水家の記録をみると、藩で遠州流をまったくしなくなつたということではなかったことが知られる。藩茶道として、表の茶道流派は石州流ではあるが、一方で遠州流も残っており、彼らもまた藩茶道を支えていたことが知られた。

江戸中後期以降は、松平不味も会津藩をはじめとして取りあげた諸藩も、藩茶道は石州流が主流であったことは事実である。しかし、同時に遠州流を抱えている藩がみられることも知られた。これは、とりもなおさず武家茶道において格式性のある遠州の流儀というのが除いてはおけないものであったから、とも云えるだろう。また、松平不味・松平定信のように、藩主などが個人的に遠州に傾倒してそれを取り入れていたことも確かである。この場合、フォーカスされるのは「遠州流」ではなく、あくまで遠州自身に対する意識であつて、江戸も後期になると小堀遠州という人物・個人に感心があつまり、遠州が浮かび上がってきている様子が知られる。

結章

「遠州流」の拡がりには、ひとつには武家方、もうひとつには町方への拡がりにより、各層へ遠州流が浸透していったことによるだろう。

「流派」という意識が徐々に芽生えはじめ、「門弟」という制度がはじまる初期において、遠州の流儀を継いでいた者たちもまた、「遠州流」という帰属意識のもと、流派のオリジナリティを確立しようとしていたのではないだろうか。

そもそも織部・遠州までは「流派」という意識はなかっただろう。織部を冠する「織部流」も後世に現れたものである。遠州の時代までは流派という意識はなく、先師の習いによって茶の湯を展開していたが、遠州が没した後の時代は世の中も様変わりしていた。文化消費の中心層が上流町人に移りつつあった江戸中期、千家は茶の湯における家元制度を確立し、利休百回忌、『南方録』などを追い風におおいに盛り上がった。また、武家の茶の湯では、皆伝を認めていた石州派が各地に広がりをもたせていた。さらに、本の板行が流行り茶書も多く出版されるようになる。そのなかでも茶人の系譜を記したものによって、「流祖」という意識はよりつよく顕在化する。「流派」以前から「流儀」は存在しており、しかし「家元」などの意識によって「流儀」は「流派」と置き換わる。こうした新たな価値観が生まれたのが江戸の中期であつたのだろう。

そのような時代に、千家と石州流の勢いに挟まれ、遠州の流儀に習っていた

者たちは流派としての確立を考えたのであり、帰属意識による正当性の主張が、少なからずあったのではないかと考える。それを担ったのが、一方は遠藤元閑など町人と、もう一方が桜山一有といった藩茶道役の人間である。

柳営茶を実践していた藩茶道役の人間は、実際のところ初期のころは町人茶人ほど他流をライバル視していなかったのではないだろうか。もちろん、『当流聞書口伝』で桜山一有は石州のことを辛辣に語っている。これをライバル視の表れと捉えるか、先人の態度にくらべて未熟ゆえの批判ととるか微妙なところではある。だが、利休回帰の盛り上がりと共に、にわかには世間が千家へ傾倒しはじめると、藩茶道役の人間もこうした千家・石州の流れに反応せざるを得なくなつたのではないかと想像する。そうしてそちらに引つ張られるようにして、『流派』の意識を強くしていったのだろう。

「遠州流」は前時代からある式正の茶という、武家の正統な茶を肅々と営んでいた。武家層でたしなまれ、一方では遠藤元閑など茶書の中にまとめられ、あるいは青木宗鳳のように流祖を利休と同時代にまでさかのぼり、台子相伝による正当性を主張するなど、遠州の流儀は式正の茶であることがオリジナリティとなつたのだろう。

その意識のもつとも顕著な例が『遠州流茶具規矩之伝』・『遠州流書院正飾之図抄聞書』という二書であり、前者は織部の創始した御成のための茶室を記し、道具の規矩では利休・織部に比重をおいて、古い習いであることを示している。しかし、遠州の名が見られないということではなく一カ所でも見られることから、利休・織部と継承されてきていることを主張している。また、『遠州流書院正飾之図抄聞書』では、東山殿以来の書院飾りについてふれ、「正飾」を示している。そして、この両書が編纂されたのが、正徳から享保のことである。

以前から茶の湯を行ってきた藩の茶道では、「流派」という概念のもとで茶の湯を行っていたわけではなく先人の茶の湯に学ぶことは習いの内として当然にあっただろうが、兎にも角にも武家にとって茶の湯は「將軍のする茶の流儀」が第一であるというその一点が大事である。だから藩の国許では様々な流儀の茶がされていても、織部から続く將軍茶湯を整えた遠州の茶は式正という観点から求められ、藩によっては遠州の流儀が生き続いていたのではないだろうか。

遠州の式正とは、囲・書院・鎖の間を使用しておこなう数寄の御成であり、それは、東山殿より続いて、秀吉の前田邸御成の室礼を整えた有楽から、御成の織部格の茶室を創始した織部と、継承されてきたものであった。

一方、町方では流派、とくに千家への意識は強くなっていく。そのような中で出版物を通して「遠州流」を武士層のみならず、町人層へも広めたであろう人物が遠藤元閑であった。元閑は実に多くの著作を板行したが、その内容は、茶の湯に限らず礼節にふれるもので、中間層の増加にともなう教養への啓蒙であり、また余裕のできた庶民にとっては、一種の欲を満たすものであったのではないかと考えられる。これまでは上流階級で行われてきた文化が、下の層にもおりてくるのである。さらに、遠藤元閑は『茶湯献立指南』のなかで、「不行義なる人も、茶の湯を習いてハ、作法正しくなる」といつており、茶の湯をいたす事で礼儀作法を身につけるといふのは現代でも通じる印象である。一方で、武家・旗本層にとっては必要な教養書としての需要もあつたであろう。

『茶之湯六宗匠之伝記』を記した遠藤元閑は、その凡例に珠光から遠州までを六宗匠として挙げ（「前略」）其外器物多く物数奇をしとふ、其功如神、宗甫公の後に茶之湯の宗匠絶終ぬ。これと云も遠州公ほどの人なき故ならん」とまで云っている。このとき元禄十五年（一七〇二）で、石州が世を去つてからおよそ三十年たつ。石州存命で話題に入れるには憚る、という時代でもないうえ、存命だしたらなおさら無礼なことである。しかし元閑は、遠州の跡を継いで將軍家四代・家綱の茶道指南役ともなつた石州を宗匠に数えておらず、きつぱりと「宗甫公の後に茶之湯の宗匠絶終ぬ」と云っている。

戦国期から江戸幕府開幕まで大名たちが執心していた茶の湯は、世の中が平定され安定期に入ると、派手なものではなくなったのだろう。そもそも、江戸初期の茶の湯の御成は徳川秀忠・家光による政治色が拭えないものであり、それだけの役割があつたのだろうが、安定した世ではより個人的に楽しむものへと大名の中でもその価値観が変化したものと思われる。遠藤元閑が遠州を以て最後の宗匠といつたのは、世の流れからしてもあながち強がりとはいえない指摘であつたかもしれない。しかし事実、石州流は諸藩に伝播しており武家茶道で主流であつたことは確かである。遠州流を強調するのに、遠州のあとに宗匠

がいてはその意義が薄れることも当然で、遠州を最後の宗匠として位置づけようとするのは自然な言説である。また、世に千家が勢いを増してくるときに、利休系の石州流を認めてはまずまず武家茶道・遠州流の骨格が定まらなくなる。こうした様々な要因によって、「遠州流」はその核を式正と正統性の継承に求めたのだろう。またそれは、青木宗鳳の主張しようとした、遠州流（宗及流）にも云えよう。利休とならぶ茶人であった津田宗及に流祖を設定して、その息子であり遠州とも関係の深かった江月宗玩による台子伝受に、その流れを見いだそうとしたことである。茶の湯における「遠州流」確立期には、こうした意識と展開があったのだろうと考えられる。

また、江戸中後期から幕末にかけて大流行した遠州流花道は、その芽が遠藤元閑の茶書に見いだされ、やがて数寄者を生み出してくる茶の湯にとつて歴史的宗匠であった遠州が、もともとあったいけ花の習いに逸話的に当てはめられることよつて、遠州の個性が立ち、それによつてより流派性が顕著になってきたと考えられる。こうしたことから云えるのは、江戸中期以降になると、遠州という個人が際立ってくる傾向があるということである。

さらに、前提として花道流行の背景は、町人の住まいの充実と関係しており、花を生けるにも、まずは環境が必要である。これは花に限らず、「普及」という観点からみれば、ごく自然な条件であろう。近世後期から徐々に床などをそなえる家が増えてくる、こうした生活環境の変化も花道人口増加の一因であろう。

茶道界における遠州流の継承、遠州流の核となり、その後にも求められたものとは、「式正」・「格式」であろうが、花道における遠州流の隆盛は、こうした核となった「遠州流」のかざり、という面において、当時普及しつつあった室礼装置である床に、簡略化した書院飾りとして、さらには茶の湯における数寄とが重なったのではないだろうか。そこに飾られるのは茶花ではなく、遠藤元閑の板行書にみられた、なげ入の花が、茶の湯と花との橋渡しとなったのだろうと考える。そしてそれは佗びを主とする千家・石州のイメージではなく、やはり「遠州」であったといえる。茶の湯ほど道具を整える必要はないいけ花は、庶民にも手の届きやすいものであった。

こうした「遠州流」の発生から展開までを紐解くと、初期は武家茶道として遠州にもっとも近い層であった村田一斎・桜山一有のころには、生きた遠州の習いが継承されていたのに対して、町人文化旺盛の時代である遠藤元閑・青木宗鳳のころになると、遠州は器物によつて見いだされるようになり、遠州という人間から離れて、流儀が展開していく様子がみられた。こうした道具への偏重は、茶の湯に参入してくる豪商の道具への興味が高まりをみせたこともひとつの要因であっただろう^{四五}。

同時に、いけ花の方では、遠藤元閑の茶書に、花道につながる「なげ入」という芽を発し、さらに遠州の「数寄」という像もそこに介在することよつて、元禄以降の町人文化隆盛のそれら庶民への拡がり、「遠州流」の一般への浸透を促したのではないかと考える。

明治三十三年（一九〇〇）に出版された『百家系譜』の「插花系図」には、「池之坊」・「青山流」・「松月堂古流」・「慈溪流」・「美笑流」・「石州流」・「古流」という複数の流派系譜が一頁に記載されているが、遠州流に関しては「遠州流各派」として、遠州流だけで一頁をさいて掲載している。それだけ、花道・遠州流は拡がりをみせていたことが知られる。

こうした庶民への拡がりを背景にここに引用すべきは、嘉永五年（一八五二）に刊行された『新編欄間雛形』の序文にみえる「此書は当時流行の遠州形の模様を多く聚め」という一文である。これももっとも近世末期から近代にかけての「遠州」に対する意識を顕著にあらわしているのではないかと考えるのである。この一文の意味するところはなにか。この『新編欄間雛形』出版当時の幕末に、欄間を入れた座敷や、床を設ける家が増え、花道における遠州流も隆盛してくるなど「遠州」が流行していたと考えられる。需要との兼ね合いを意識する出版物において、こうした意識が謳われるのはすでに出版される以前よりその傾向がみられていたはずである。欄間に限らず、たとえば「意匠的な空間作り」そのものが遠州的であると表現されるのであれば、広島の不二庵の作例などは遠州の数寄が継承された茶室ともいえるし、もっと広い意味でこの頃にはすでに「遠州風」といわずとも遠州の影響が浸透し基底となっていたとも

云えるだろう。

さらに、こうした「遠州」への美意識は、江戸時代初期の寛永の美とも結びつけられ、また逆に遠州を寛永の代表者としてとらえることで、寛永の美を、遠州へと帰結させたのであろう。それは「遠州の評価」という点において、桂離宮の遠州説にも関係のある拡張現象であろうと考える。そしてまた、「遠州好」という語は、言葉の印象化による、意味の拡張もあつたのではないかと考えている。「好」という語は「作」・「風」の意味も持ち合わせ、またこれら語は「好」に内包される。それぞれが意味的干渉をしあい、都合によって言い換えられたことで複雑となり、結果として「遠州」の拡張を招いたのだろう。

また、「遠州流」というのは、反対に、個人的な「流儀」・「やり方」から、「流派」という組織の規格における「流儀」・「やり方」という主語の変化があり、やがてその流派「遠州流」に、「遠州」という意識が包括されていく。それは、規格が定まっていく過程の時代背景にも影響を受けていたことは無視できない。それが、武家における「遠州」と、町方における「遠州」という、ふたつの流れを生みだし、取り込まれ、拡がりをみせた「遠州」ではなかっただろうか。

本論文では、近世中期以降にみられる「遠州流」の発生と展開に関して検討をしたが、これは「遠州流」の歴史の一部概要を浮き上がらせたに過ぎない。

「玉川遠州」などの遠州流派も含め、今後さらなる詳細な研究が必要であろう。また、今回本論文では、本家に直結する「家」での継承は、採りあげていない。オリジナルを軸として現象化は周辺に展開していくものであり、まずは、この文化現象をその背景と共に明らかにしたいと考えた為である。今後は小堀家の継承についても触れながら検討していく。さらに一方で、この研究を基底にし、近代において「遠州」がどのような影響を及ぼしてきたか、ということも明らかにしていきたいと考えている。

注釈

- 一 『茶の湯文化学』第十一号、二〇〇五年、四十一頁―五十五頁
- 二 岩井氏の論文では「綺麗さび」ではなく「きれいさび」と表記されている。
- 三 野村美術館『研究紀要』第二十六号、二〇一七年三月刊行、十九頁―三十二頁
- 四 森修「日本文学史の時代区分」『人文研究』八巻二号、一九五七年（十六頁、三十七頁）また、江戸の出版と背景に関する研究では、長友千代治『江戸時代の凶書流通』（仏教大学通信教育部、二〇〇二年）が挙げられる。
- 五 森蘊・恒成一訓『小堀遠州』一一四頁
- 六 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇〇年～二〇〇二年
- 七 「〇〇風の作（品）」などと繋がる場合もあるが、この場合「風」と「作」はそれぞれ独立しているものであろう。
- 八 この場合、最初の目的であるその対象自体が意味となろう。
- 九 生年月に関しては、実際の生年月日は少しずれているようだ。次のとおり検証した結果、一六四九年生まれとなる。
 - 万治三年（一六六〇）……一二歳「典拠」：『茶湯古法』
 - 天和三年（一六八三）……三五歳「典拠」：『当流聞書口伝』
 - 享保三年（一七一八）……七〇歳「典拠」：『博多宗短之書』
 - 享保十三年（一七二八）……八〇歳「典拠」：『覚書』・『茶湯古法』
- 一〇 「小堀遠州と武家の茶の湯」佛教大學大学院紀要三十五所収、二〇〇七、二二頁―四一頁
- 一一 石州は皆伝を与えていたため石州流は全国に広がり多くの石州流諸派を生み出した。
- 一二 上田家文書調査報告書、政治史・茶道史研究協議会編『上田宗簡茶書集成』広島市教育委員会、二〇〇五年

- 一三 特に『古織伝』や『織部百ヶ條』とおもわれる内容のものが多くみられる。
- 一四 『慶應義塾大学高橋篤庵文庫目録』によると「細川家の近習による茶会記」との説明であるが、もっと具体的に云うなら、桜山一有の葬儀の様子などが書かれていることから、おそらくは桜山家の人間もしくは桜山家に近い人物によるものである。
- 一五 石田誠齋「熊本の茶統」『茶道全集』十一巻所収（井口海仙等編、創元社、一九三六年―一九三七年）
- 一六 千宗室監修、筒井絃一編『茶の古典』『茶道学大系』一〇巻、淡文社、二〇〇一年
- 一七 本論第四章において採りあげている広島県・御手洗の金子家などが挙げられる。
- 一八 とくに、元禄以降にみられるようになる裕福な町人層、たとえば鴻池家などは大坂で両替商をして豪商となり「はてなの茶碗」など、落語にも語られるほどの数寄者で、多くの茶器を蒐集したという。大名相手に金を貸すなど、その財力は身分制度でいう上位の武家をも超えるほどのものでもあった。
- 一九 横田八重美「遠藤元閑の板行茶書」、一七三頁、一七四頁
- 二〇 『初心集』第一巻の序に「一、茶道ニ肝要の□□るハ、茶書を板行する事ハ、努々無事也」とある。
- 二一 前掲・山田哲也「茶書によつて家元を目指した茶人青木宗鳳―浪華文庫の考察を通して」一八七頁、一九三頁
- 二二 山田哲也は浪華文庫に宗鳳の自著以外の本が収蔵されていることに関係して「宗鳳の時代は、写本の中には入手どころか、閲覧も容易にできる状況ではなかったと考えられる。とくに伝書の類はその可能性が強い。」と云っている。（前掲・一九五頁）
- 二三 江戸後期ごろと思われる、千家流の七事式について書いた『茶道七事之

式』の序文には「其他器物の取あつかひにいたるまで。取捨する所は銘々の了簡に有へし、織部・遠州、其他諸流も各取捨有へし、故に各一流儀の立たるもの也、己に今の千家、古の千家にあらず、是代々取捨するによりてなり」とも書かれている。

二四 前掲・岡田幸三編『刊本花道書年表』参照

二五 華道家の父を持つ山根有三も、著書で建築と花の關係に幾度も触れている。(山根有三『花道史研究』中央公論美術出版、一九九六年)

二六 『生花早満奈飛』は十編からなっており、様々な花書を編纂したものであるといわれるから、べつに出典の書物があるのである。

二七 この碑は地震によって倒壊してしまい、今は見る事ができない。

二八 炉縁には「弘化四年 丁未□月□八日、金子十郎右衛門善之下群町□、山本新□造之」とあり、これに書かれている「金子十郎右衛門」は御手洗港に立つ天保三年の年紀が入った石灯籠にも、「金子忠左衛門善□/□ 十郎右衛門善之 敬立」と彫られておりその名前を確認することができる。また、『藝藩輯要』には「金子十郎右衛門、群町扶持人(御手洗町)」と記録がみられる。町の有力者だからこそ叶った茶室であろう。

二九 稲垣栄三著、福田晴虔編『茶室・数寄屋建築研究』中央公論美術出版、二〇〇六年、一一二頁—一二九頁

三〇 『茶室・数寄屋建築研究』ではこの窓に関して次のように云っている。

「十八围之窓」ではこの長粉戸の記入がなく、単に「障子」とある。はじめ障子であったのを、明るすぎるといふ理由で長粉戸に変えたということも考えられないではない。

三一 古田織部作とも云われている。

三二 西廻海運のルートとして重要な拠点であり、また物資の運輸のみならず、参勤交代の船や外国船など多くの船が行き交う御手洗港は歴史的にも要所であるといえる。

三三 加賀藩近辺に存在した十村制の十村役を務めた豪農。内山家旧蔵の遠州流茶書は大森漸斎を流祖にもつ玉川遠州流である。

三四 山形県酒田市の豪商・本間家の文庫。「8年(1788年)本間家三代目の当主

光丘(みつおか)は、修学のために文庫を兼ねた寺院の建立を江戸幕府に願い出しましたが、新寺停止の政策により、果たし得ませんでした。光丘(みつおか)の遺志を継ぎ、八代目当主光弥(みつや)は、先祖伝来の蔵書2万冊と建設費、及び維持基金として10万円を寄贈して大正14年(1925)に財団法人『光丘(ひかりがおか)文庫』を設立した。

(<http://library.city.sakata.lg.jp/bunkazai.html>) 最終閲覧2018/06/24

本間家は北前船の隆盛もあり、三井家・住友家にも劣らぬ大商家であったという。また、砂防林の植林をはじめインフラ整備から大名貸も行うなど、その財力は莫大であったことが知られる。

三五 石州流不昧派、または不昧流という。

三六 さらに、堀口捨己『茶室研究』二八三頁には寛政のころに宗祇和尚によって書かれた「頌偈雜録」には「龍光院遠州之囿有之所」と記録があることが書かれている。

三七 『翁草』巻五十六(国立国会図書館蔵)に「小堀和泉守茶道功者の事」として載っている。

三八 筒井絅一『茶書の研究』

三九 『福島県史』二〇巻、各論編・第六、一九六五年

四〇 『当流聞書口伝』『石井至毅著作集』『当流聞書口伝』

四一 これらの例とは逆に、仙台藩では、はじめに遠州とも関係の深い清水道閑を招聘したのに、後にこの清水家に石州流を学ぶよう命を下して流派替えをしている。それというのも、仙台藩の茶道は柳営の茶の流儀であったためといわれる。

四二 前掲『福島県史』

四三 『仙台市史』参照(第二章、仙台藩の茶道について)

四四 前掲『仙台市史』参照

四五 また、こうした物に因る見方は、遠州自身から切り取られた遠州の一部であり、これが遠州の偶像として膨らんでいく要因となつたのではないか。

参考文献

- 水原翠香『茶道と香道』(第五卷). 博文館.(1908).
- 高谷隆『古今茶人系譜大全』・藝術サロン社.(1948).
- 堀口捨己『桂離宮』・毎日新聞社.(1952).
- 高谷隆『古今茶人系譜大全 続編』・藝術サロン社.(1953).
- 千宗室編『茶道古典全集』・淡交社.(1962).
- 内藤昌『新桂離宮論』(第1刷). 鹿島研究所出版会.(1967).
- 久保田滋、瀬川健一郎『日本花道史』・株式会社光風社書店.(1971).
- 林屋辰三郎、横井清、檜林忠男『日本の茶書』・平凡社.(1972).
- 岡田幸三『刊本花道書年表』・株式会社思文閣.(1973).
- 橋本博『茶道古典集成 茶道大鑑』・大学堂書店.(1973).
- 林屋辰三郎『化政文化の研究』株式会社岩波書店.(1976).
- 堀口捨己『茶室研究』(復刻版). 鹿島研究所出版会.(1977).
- 中村昌生、恒成一訓『茶室大観』(第1版. 第Ⅲ卷). 株式会社創元社.(1978).
- 村井康彦『君台観左右帳記／御飾書』『茶の湯の古典』(第1巻). 世界文化社.(1983).
- 熊倉功夫『寛永文化の研究』・吉川弘文館.(1988).
- 和辻哲郎『桂離宮』・中央公論社.(1991).
- 世田谷区立郷土資料館編『続石井至毅著作集』世田谷区教育委員会.(1992).
- 工藤昌伸『江戸文化といけばなの展開』『日本いけばな文化史』2. 株式会社同朋舎出版.(1993).
- 『千家の茶の展がり―宗全・不白・宗達―』株式会社婦人画報.(1995).
- 津田良樹『街道の民家史研究』・芙蓉書房出版.(1995).
- 日向進『近世京都の町・町家・町家大工』・株式会社思文閣出版.(1998).
- 千宗室 監修『茶道の歴史』『茶道学体系』(第2巻). (谷端昭夫, 編) 株式会社 淡交社.(1999).
- 矢野環『君台観左右帳記の総合研究』・勉誠出版.(1999).
- 筒井絃一編『茶の古典』『茶道学体系』第10巻. 株式会社淡交社.(2001).
- 長友千代治『江戸時代の図書流通』・仏教大学通信教育部.(2002).
- 齋藤和江『近代大名茶の湯の研究』・京都造形芸術大学大学院.(2003).
- 筒井絃一『茶書の研究』株式会社淡交社.(2003).
- 増田幸雄『遠州の名庭』・株式会社ディーアンドエイチ.(2004).
- 深谷信子『小堀遠州の茶会』(第1版). 柏書房株式会社.(2009).
- 熊倉功夫『小堀遠州 茶友録』・中央公論新社.(2010).
- 谷晃、校訂・矢ヶ崎善太郎 校『茶譜』『茶湯古典叢書』(第5巻). 思文閣.(2010).

辞典類

- 『日本国語大辞典』(第2版). 小学館.(2000-2002).
- 『角川茶道大辞典』(普及版). 角川書店.(2002)